

Factors Affecting Educational Aspirations of Senior Secondary School Students' in China

張, 春蘭
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/3675>

出版情報：飛梅論集. 4, pp.111-125, 2004-03-22. Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



中国における高校生の教育アスピレーション分化とその規定要因

—A市の高校調査をもとに—

張 春 蘭*

1. 課題設定

本稿は、中国における高校生の教育アスピレーションの分化とその規定要因を家庭背景、高校ランク、価値志向との関連で検討しようとするものである。

教育アスピレーションとは、より高い水準の教育を受けようとする個人の欲求・願望のことであり、学歴達成・職業達成に強く影響を及ぼす要因の1つである (Sewell, Haller&Portes 1969、藤田 1979)。高校生の教育アスピレーションについては、これまで数多くの研究が蓄積されてきた。すでに明らかになったように、高校生の教育アスピレーションは、親の学歴や職業といった出身階層によって影響されるだけでなく、その高校ランクによっても強く規定されている⁽¹⁾。また最近の研究では、生徒の職業希望や職業選択に関する価値志向は教育アスピレーションと関係のあることが明らかにされた。職業希望と教育アスピレーションとの関連性を検討した有田 (2002) の研究によると、高校生本人の職業希望が教育アスピレーションに重要な影響を及ぼしているという。また生徒の進学希望⁽²⁾形成における地位達成と自己実現という職業選択に関する価値志向の機能に注目した荒牧 (2002) の研究では、地位達成志向は大学進学希望の形成に正の効果をもっているのに対し、自己実現志向は進学希望にはあまり影響を与えていないと結論付けられた。このようにみると、教育アスピレーションの形成においては、家庭背景、高校ランク、生徒の職業希望、価値志向などのさまざまな要因が存在している。またこうした要因は、相互的に関連し合いながら教育アスピレーションの形成に影響を及ぼしているのである。したがって、教育アスピレーションの形成には、家庭背景が直接的に関わっていると同時に、学校ランクや職業選択に関する価値志向を媒介にしてさらに間接的な影響を及ぼしているというメカニズムが存在していると考えられる。

それでは、以上のような教育アスピレーション形成のメカニズムは、はたして如何なる普遍性をもっているのだろうか。中国の社会的背景に目を転じてみる場合、そのメカニズムはいかに存在し、またどのような特徴をもっているのだろうか。これらの課題の究明は本研究のねらいである。なぜならば、今日の中国においては以下のような独特な社会的状況や高校教育の状況があるからである。

まず、社会階層が分化しつつあるという状況の中で各階層の組織的資源、文化的資源、経済的資

*九州大学大学院博士後期課程3年

源の所有状況が大きく異なっている(陸 2002)⁽³⁾。特に知識・技術という文化的資源の所有状況において階層間に大きな差異が生じているということは、学歴・教育年数が各階層の社会的地位を規定する重要な要因となっていることを意味するのである。中国では、80年代から始まった経済改革開放にともない、社会階層構造の急速な変動が起っている。新たな階層形成過程の中で文化的価値に対する評価が高まっており、学歴を重視する傾向が見られるようになった(朱 1998)。その結果として、学校教育は、社会的地位達成・社会移動の重要なチャンネルとなっており、高学歴の獲得が社会的地位の上昇移動の最も有効な手段とされているのである。そして人々の高学歴志向が再び台頭し、いわゆる第2次「学歴ブーム」を迎えている(朱 1998)。このような高学歴志向は、特に親の子どもに対する大学進学期待に反映されている。全体的にみると、家庭背景の状況が異なっているにもかかわらず、ほとんどの親たちは子どもに大学まで進学してほしいと期待している傾向が現れている⁽⁴⁾。一方、このような子どもに対する高学歴期待には階層差も生じている。姜(2001)の研究によると、親自身の学歴が高いほど子どもに対する学歴期待水準が高くなるという。したがって、高校生の将来より高い教育を受けようとする欲求・熱望、あるいは教育アスピレーションには、それぞれの家庭背景による直接的、また間接的な影響が存在していると考えられる。

また、中国では各地に「重点高校⁽⁵⁾」が設けられており、公立普通高校の間に教育費、教師、生徒、学校施設・設備などの教育資源をはじめとして、大学進学実績および社会的評価にまでわれわれの予想以上の大きな格差が生じている(滕・趙 1995、袁 1999)。いわゆる高校間格差が、現在、問題にされているのである。しかもそれは、とりわけあまり目に見えない生徒の進学意識に反映されている。中学生を対象としたSISS⁽⁶⁾調査研究によれば、重点校では非重点校に比べて大学と大学院進学を希望する生徒の割合がかなり高くなっている。したがって、中学生の進学希望において見られたこのような学校間格差は、進路選択と進路決定の局面に直面している高校生の場合、さらに大きくなり、高校ランクの教育アスピレーションに対する影響力はさらに強くなると推測される。

さらに、主に職業に見られる階層分化およびそれによる各階層の社会的地位の変化の中で、高校生の職業選択における価値志向には一定の特徴が現われている。最近の調査によれば、子どもたちの将来の希望職業において親の職業観による影響が見られるが、と同時に、自分自ら職業を選択する傾向も示されている。それは、特に職業選択志向において職業を通じた自己実現、また経済的利益や社会的地位などを重視する傾向にあるという⁽⁷⁾。このような特徴を教育アスピレーションとの関連性から考えてみると、家庭背景が職業選択における価値志向に影響を与え、またこの価値志向が教育アスピレーションに影響を与えるということが推察される。換言すれば、高校生の職業選択志向には階層差が存在しており、その相違が教育アスピレーションの差異を生み出すというメカニズムが存在しているのではないかと思われる。

そこで、本稿では、以上のような中国の社会階層状況の変化、学校間格差の問題状況を手がかりに、それぞれ異なる家庭背景をもつ高校生の教育アスピレーションにおいてはどのような分化が見られるのか、またその分化をもたらした要因は如何に存在しているのかについて検討したい。

2. 研究方法

2.1. 分析枠組み

以上の目的を達成するために、本研究では、中国A市で行った調査データを用いて高校生の教育アスピレーションの分化とその規定要因を主に家庭背景、高校ランク、価値志向との関連で明らかにする。具体的には以下のように検討していく。まず、生徒の教育アスピレーション分化はどのようなになっているのかを高校ランク別、男女別に見ていく。また、その教育アスピレーション分化は、如何なる要因によって規定されているのかを男女別に分析を行う。その際、特に家庭背景、高校ランク、価値志向などが教育アスピレーションに対してどのような直接効果、あるいは間接効果をもっているのかに注目する。分析枠組みは図1に示す通りである。

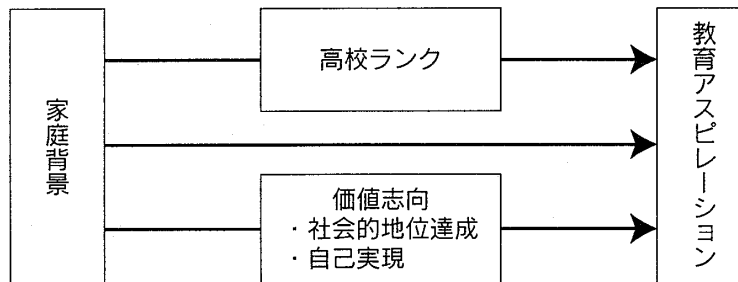


図1 分析枠組み

なお、以上の男女別の分析方法と規定要因としての価値志向については、さらに次の2点を付け加えたい。まず、男子と女子のもつ教育アスピレーション水準とその規定要因について比較分析を行うこととしたのは、次の理由によるものである。それは、これまで男女平等と主張された中国社会では、最近女子大卒者は就職難の状況にあるといわれており、このような状況を考慮すれば、家庭背景、高校ランク、職業に関する価値志向といった要因は、男女間の教育アスピレーション分化をもたらし、そして男女の教育アスピレーション形成には相違が存在しているのではないかと推測される。したがって、男女別に比較分析することによってはじめて男子と女子の教育アスピレーション形成のメカニズムが見えてくると考えられる。

また、職業に関する価値志向については、主に地位達成志向と自己実現志向に焦点をあてる。なお、地位達成志向は、主に社会的地位達成志向として捉える。このような設定に示唆を与えてくれたのは荒牧（2002）の研究である。荒牧は、高校生の進路希望（大学進学を希望するか否か）における価値志向の影響を、主に地位達成志向と自己実現志向に注目して検討した。しかし彼がすでに指摘したように、そのような地位達成志向は、「高学歴の獲得を媒介とした社会・経済的地位の達成志向の指標として構成される」（荒牧 2002、18頁）ものである。一方高学歴の獲得を必要としない経済的な達成志向も存在しているため、地位達成志向を検討する際、さらに社会的地位と経

済的地位の達成志向を区別する必要があるという。そこで、本稿では、とりわけ職業に従事することによって得られる社会的地位・名声・威光、ないし集団所属、社会的承認といった職業に関する社会的地位達成志向（以下では、地位達成と略す）と教育アスピレーションとの関連に注目する。というのも、中国では、職業の経済的地位よりむしろ職業の社会的地位のほうが重視されている傾向にあるからである。中国における職業威信に関する調査研究（陳 1995）によれば、人々は主に職業の社会的地位とその職業に必要なとされる学歴要件によってさまざまな職業にランクを付けている⁽⁸⁾。つまり、職業の経済的地位に比べ、職業の社会的地位と教育達成のほうが職業威信スコアの重要な評価基準となっている。この点と関連してみると、今日の高校生の職業選択志向を高学歴の獲得を媒介とした社会的地位達成志向として捉えるのが妥当ではないかと考えられる。

2.2. データ

分析に使用するデータは、2000年3月から4月にかけて、筆者が中国A市における12の⁽⁹⁾高校に在籍する3年生620名（男子：341名54.9%）を対象として実施した「高校生活と将来の進路選択に関する調査」の結果である。A市で調査を実施したのは、その都市が省都（省は日本の県にあたる）であり、しかも重点校や非重点校などさまざまなランクの高校が集中しているため、1つの地域における生徒の教育アスピレーション分化とその規定要因としての家庭背景や高校ランクや価値志向による影響を全体的にうかがうことができると考えたからである。また、調査対象校の選定に当たっては、A市における全部の重点高校（企業立重点校2校を除く）と一部の非重点校を選択した⁽¹⁰⁾。対象校の属性については表1の通りであり、その特性は、特に高校ランクの間で中卒成績と大学合格率の差が大きいという点にある。なお、高校生の教育アスピレーションをよりの確にとらえるために、調査は、将来の進路選択がほぼ決定された高校卒業前の約3カ月である3月～4月に実施した。調査の実施方法は、各教室において生徒に質問紙に一斉に記入させる集団自記式をとった。質問紙はその場で回収し、100%の回収率となった。

表1 調査対象校のプロフィール

学校ランク	属 性	対象校所在地区	対象校数・対象者数	中卒統一試験成績	大学合格率
ランクⅠ	省の重点校	A区、B区(各1校)	2校・100名	598.5点	82.7%
ランクⅡ	市の重点校	B区、C区(各2校)	4校・218名	573.6点	50.9%
ランクⅢ	非重点校	B区(2校)、C区(3校) D区(1校)	6校・302名	510.0点	29.9%

注：1) 中卒統一試験成績は、A市の統一試験によるものであり、対象校全体の平均を示す。

2) 大学合格率は、2000年7月に行われた全国大学統一試験での対象校全体の大学合格ライン(すべての高等教育機関を含む)に達した者の割合の平均を示す。なお、A市全体の平均は39.9%である。(2000年A市教育委員会の統計資料により算出)。

2.3. 変数

目的変数：

教育アスピレーションについては、「あなたは、現在の学業成績と家庭状況を考慮する場合、将来どこまで進学したいと思っていますか」（高校、大学専科、大学本科、修士、博士）という質問に回答を求めた。なお、分析には希望進学段階を教育年数に換算して用いる（非進学=0、大学専科=2、大学本科=4、修士=7、博士=10）。

説明変数：

①家庭背景：両親の学歴（教育年数に換算）について、「あなたのお父さんとお母さんが最後にいらっしゃった学校は次のどれにあたりますか」（小学校、中学校、普通高校、中等専門・技術高校、大学専科、大学本科、大学院）という質問に回答を求めた。なお、高校生の親は中国の「文化大革命」以前の「5・4学制」で教育を受けたと推定したため、分析で教育年数に換算した（小卒=5、中卒=7、高卒=9、中専・中技=11、大専=12、本科=13、大学院=14）。

また、中国におけるこれまでの社会的階層体系は、都市・農村部の2次元構造とそれに対応する都市と農村戸籍という戸籍社会的身分制度⁽¹⁾（朱 1998）によって形成されてきた。この戸籍制度は社会的管理の機能だけでなく資源配分の機能も果たしており、個人の社会的移動ないし学業達成・社会的地位達成に大きな影響を及ぼしている（許 2000）。そこで、戸籍は家庭背景要因として生徒の教育アスピレーションに影響を及ぼすと考えられるため、本稿では、都市部戸籍=1、そうではない=0をダミー変数として分析に用いる。

②高校ランク：ランクⅠ=1からランクⅢ=3とする尺度を用いるが、重回帰分析では重点校と非重点校による効果を比較するために、省の重点校のランクⅠを比較群とし市の重点校のランクⅡ=1、そうではない=0、また非重点校のランクⅢ=1、そうではない=0をダミー変数として用いる。

③学業成績：生徒本人の学業成績として、自己申告による中卒統一試験の成績（=高校入試成績、以下で中卒成績と略す）および現在の成績に対する自己の総合評価（現在の成績と略す）5段階を用いた。これらについて次のような質問に回答を求めた。「あなたの中卒統一試験での成績は、何点でしたか」、「あなたの今の総合的な成績は、クラスの中でA～Eのうちのどこに位置していますか」。なお、分析には中卒成績は、点数をそのまま使用する。現在の成績はA=1からE=5とする尺度を用いる。

④価値志向：調査では「将来の職業を選ぶ場合に、あなたは次の要因をどれくらい重要だと考えますか」という職業選択で重視する要因、すなわち就職先の知名度、自分の趣味・関心、夢の実現など13の要因について複数選択を求めた。質問項目への反応方式としては、「全く重要ではないと思う（1点）」から「とても重要だと思う」（4点）までの4段階評定を設けた。なお、価値志向については、荒牧（2002）の分け方を参照したうえで社会的地位など外的基準を重視する度合いを社会的地位達成志向の変数とし、自分の興味・関心など内的基準を重視する度合いを自己実現志向の変数として用いた。この2変数の作成について、具体的には職業選択で重視する5つの要因、すなわち「就職先の知名度」、「社会的評価」、「資格が生かせる」、「自分の興味・関心」、「自分の夢の実現」

を主成分分析した。その結果、全分散の61.7%を説明する2つの主成分が抽出された。表2に示されたように、第1主成分は「就職先の知名度」、「社会的評価」、「資格が生かせる」に高い因子負荷量をもつため、これらは社会的地位達成志向として捉えることができる。また第2主成分は「自分の興味・関心」、「自分の夢の実現」の因子負荷量が大きいため、これらは自己実現志向として捉えることができる。したがって、これらの主成分得点を2つの価値志向の尺度として用いる。

表2 職業選択で重視する要因の主成分分析

	社会的地位達成	自己実現
就職先の知名度	0.733	0.098
社会的評価	0.774	0.159
資格が生かせる	0.711	0.060
自分の興味・関心	0.052	0.848
自分の夢の実現	0.183	0.806
固有値	2.0	1.1
寄与率	33.6%	28.1%

注：バリマックス法回転後の因子負荷量

3. 生徒の教育アスピレーションの差異

3.1. 高校ランク別にみた教育アスピレーションの差異

具体的な分析に入る前に、ここではまず、高校生たちはどこまで進学したいのか、すなわち「より高い教育段階を達成しようとする個人の熱望」に反映される教育アスピレーションには、高校ランク別にどのような分化が示されるのかを見てみよう。

表3に示しているように、高校ランクが高いほど大学院「修士」と「博士」への進学希望者が増え、逆に「大学専科」と「本科」への希望者が減少している傾向がある。例えば、「修士」と「博士」の割合は、ランクⅠで70.7%、ランクⅡで39.9%、ランクⅢで22.6%となっているのに対し、「本科」の割合は、ランクⅠで27.3%、ランクⅡで56.0%、ランクⅢで61.7%となっている。このように、高校ランクごとに教育アスピレーションの歴然とした差異のあることがわかる。

表3 高校ランク別にみた希望進学段階

(%)

	高 校	大学専科	大学本科	修 士	博 士	合 計
ランクⅠ	1.0	1.0	27.3	48.5	22.2	100.0(99)
ランクⅡ	0.5	3.7	56.0	26.9	13.0	100.0(216)
ランクⅢ	3.0	12.7	61.7	13.3	9.3	100.0(300)
合 計	1.8	7.6	54.1	23.7	12.7	100.0(615)

注：1) カイ2乗91.261 df=8 P<0.001

3.2. 男女別にみた教育アスピレーションの差異

では、男女別にみると、希望進学段階の分化が見られるのであろうか。表4に示しているように、男子では博士までの進学希望の割合が高いのに対し、女子では大学本科を希望する割合が高くなっている。全体的には、男子のほうが女子に比べて希望教育水準がやや高いが、男女間には大きな差異は見られないということがわかる。

以上のように、高校ランクごとに見た場合、教育アスピレーションには大きな差異があるが、男女別に見た場合、その差異はあまり見られなくなった。ところが、男子と女子の教育アスピレーション形成においては、異なる規定要因が存在している可能性も考えられる。こうした要因を男女別に分けて、さらに検討する必要がある。

表4 男女別にみた希望進学段階

(%)

性 別	高 校	大学専科	大学本科	修 士	博 士	合 計
男 子	2.7	8.0	51.0	23.0	15.3	100.0(339)
女 子	0.7	7.2	58.0	24.6	9.4	100.0(276)
合 計	1.8	7.6	54.1	23.7	12.7	100.0(615)

注：カイ2乗8.997 df=4 P<0.1 なお、有効なケースの数のみを示している。

4. 男女別にみた教育アスピレーションの規定要因

4.1. 相関係数からみた教育アスピレーション諸規定要因の関連性

ここでは実際の分析に先立ち、ひとつの準備作業として教育アスピレーションと関係する諸変数間の相関係数を見ることとする。表5に示されたように、特に「家庭背景」（指標としては両親の学歴および都市戸籍）、「高校ランク」、「希望進学段階」の3者が相互に正の高い相関を持っている。また価値志向について、自己実現志向は都市戸籍とのみ弱い負の相関をもっているのに対し、地位達成志向は両親の学歴、都市戸籍と正の相関を持っている。さらに、地位達成志向は希望進学段階

と弱い正の相関をもつが、自己実現志向は希望進学段階と負の相関を持っており、しかもそれほど強くない。このようにみると、本研究で設定した教育アスピレーションの規定要因の分析枠組みは諸変数間の相関係数によってほぼ説明できるようである。すなわち、家庭背景の違いが在籍する重点校か非重点校という高校ランクの違いを生みだし、高校ランクの違いが教育アスピレーションの分化をもたらすということが一応明らかになった。一方、家庭背景の違いが子どもの価値志向を異ならせ、それを媒介として教育アスピレーション形成に影響を与えるということもみることができ。しかしこれらの諸変数の単相関係数のみから教育アスピレーション形成のメカニズムを解釈するのは十分な説明力をもっていない。そのため、重回帰分析を行うことによってさらに検討する必要がある。

表5 変数間の相関係数

	希望進学段階	地位達成	自己実現	父親学歴	母親学歴	都市戸籍	男子ダミー	中卒成績	現在の成績
地位達成	0.101*								
自己実現	-0.105**	0.000							
父親学歴	0.173***	0.093*	0.048						
母親学歴	0.173***	0.119**	-0.001	0.474***					
都市戸籍	0.156***	0.139**	-0.091*	0.234***	0.297***				
男子ダミー	0.045	-0.046	-0.023	0.027	-0.038	-0.008			
中卒成績	0.358***	0.123**	-0.037	0.210***	0.239***	0.284***	0.036		
現在の成績	-0.210***	-0.002	0.016	-0.024	0.022	0.066	-0.015	-0.301***	
高校ランク	-0.318***	-0.163***	0.050	-0.279***	-0.295***	-0.215***	0.017	-0.558***	0.015

注：* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$ 、*** $p < 0.001$ 、(N=620)

なお、高校ランクについて、ランクI（省の重点校）=1～ランクIII（非重点校）=3とする尺度、また、現在の成績は、A=1～E=5とする尺度のため、分析結果は逆の関係に見える。以下表6、表7同。

4.2. 男女別にみた教育アスピレーションの規定要因

教育アスピレーション分化の規定要因とそのメカニズムを検討するために、以下では家庭背景（父学歴、母学歴、都市戸籍）、学業成績（中卒成績、現在の成績）、高校ランク（ランクIIとランクIII）、価値志向（地位達成志向、自己実現志向）の9変数を説明変数とし、希望進学段階を目的変数として男女別に重回帰分析を行った。なお、家庭背景、学業成績、高校ランク、価値志向のそれぞれの規定力を明らかにするために、モデル1（父学歴、母学歴、都市戸籍ダミー）、モデル2（モデル1+中卒成績、現在の成績）、モデル3（モデル2+ランクIIダミーとランクIIIダミー）、モデル4（モデル3+地位達成志向、自己実現志向）の4つのモデルに分けて検討することとする。その結果は、表6と表7に示している。

まず男子の教育アスピレーションの規定要因について見てみよう。表6は男子の希望進学段階の規定要因に関する重回帰分析の結果を示している。家庭背景の諸変数のみからなるモデル1からわ

中国における高校生の教育アスピレーション分化とその規定要因

かるように、母親学歴のみが教育アスピレーションに対し統計的に有意な効果をもっている。しかしその説明される分散の割合は3%とかなり少ない。ところが、これに中卒成績と現在の成績を加えたモデル2、またそれに学校ランクⅡとランクⅢを加えたモデル3では説明される分散の割合が約16%にまで増加している。学業成績は希望進学段階に対し有意な正の効果をもっているが、ランクⅢは有意な負の効果をもっている。しかし母親学歴の効果が有意でなくなった。ここではモデル2とモデル3で母親学歴の効果が消えることは、家庭背景の効果のすべてが学業成績と高校ランクを経由した間接的なものとなっていることを意味する。さらに興味深いのは、モデル3に自己実現志向と地位達成志向変数を加えたモデル4では説明される分散が約18%にまで増えるという点である。また、ここでランクⅢの効果が消え、自己実現志向は希望進学段階に弱い負の効果をもっている。一方、家庭背景変数と高校ランク変数をコントロールした後も中卒成績と現在の成績が希望進学段階になお有意な効果をもっている。

表6 男子の希望進学段階の規定要因（重回帰分析）

性 別	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
	ベータ	ベータ	ベータ	ベータ
(定数)	***	***	***	***
父親学歴	0.064	0.048	0.032	0.042
母親学歴	0.131*	0.086	0.073	0.072
都市戸籍ダミー	0.064	0.028	0.035	0.002
中卒成績		0.292***	0.206***	0.212**
現在の成績		-0.145**	-0.166**	-0.167**
ランクⅡダミー			-0.095	-0.068
ランクⅢダミー			-0.188*	-0.159
社会的地位達成志向				0.086
自己実現志向				-0.123*
調整済R ² 乗	0.032	0.156	0.162	0.179
F値	4.597**	12.501***	9.593***	8.540***

注) *p<0.05、**p<0.01、***p<0.001、(N=599)

それでは、女子の教育アスピレーションの規定要因の構造はどうであろうか。表7は女子の教育アスピレーションについて男子と同様な説明変数を用いて分析を行った結果を示している。男女を比較してみると、まず女子の場合、モデル1では家庭背景が説明される分散の割合は依然として小さく7%となっているが、男子の説明される分散の割合より4ポイントと高くなっている。しかもそれは母親学歴ではなく父親学歴と都市戸籍ダミー変数による効果である。次にモデル2とモデル3で

は希望進学段階に最も強い効果を持っているのは、男子のような中卒成績ではなく高校ランクⅢである。さらにモデル4では都市戸籍、現在の成績、ランクⅡとランクⅢが希望進学段階に有意な効果をもつが、男子の場合と異なり、ランクⅢが最も強い負の効果をもっている。また男子で見られた自己実現志向の有意な効果が女子では認められない。

表7 女子の希望進学段階の規定要因（重回帰分析）

性 別	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
	ベータ	ベータ	ベータ	ベータ
(定数)	***	***	***	***
父親学歴	0.138*	0.115+	0.084	0.085
母親学歴	0.053	-0.001	-0.032	-0.022
都市戸籍ダミー	0.183**	0.144*	0.151*	0.154*
中卒成績		0.225**	0.099	0.106
現在の成績		-0.140*	-0.160**	-0.162**
ランクⅡダミー			-0.283**	-0.276**
ランクⅢダミー			-0.385***	-0.386***
社会的地位達成志向				-0.068
自己実現志向				-0.045
調整済R ² 乗	0.067	0.143	0.184	0.18
F値	7.406***	9.349***	9.098***	7.296***

注) * $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$ 、*** $p < 0.001$ 、(N=599)

以上の表6と表7の結果をまとめてみると、まず男子と女子において教育アスピレーションに規定力をもつ要因は異なっていることがわかる。すべての変数をコントロールしたモデル4に示されたように、中卒成績、現在の成績、自己実現志向という3つの変数が男子の教育アスピレーションに有意な影響を及ぼしており、そのうち特に中卒成績と現在の成績が大きな影響力をもっている。これに対し、都市戸籍ダミー、現在の成績、ランクⅡダミー、ランクⅢダミー4つの変数が女子の教育アスピレーションに影響力をもつ変数となっており、そのうち特にランクⅢダミーが最も大きな影響力をもっている。また、以上のような諸変数によって説明される分散の割合は男子と女子の間ではあまり大きな差が見られない。

5. 結論

これまで、中国における高校生の教育アスピレーション分化とその規定要因を家庭背景、高校ランク、価値志向と関連させて男女別に検討してきた。そこで明らかになった知見をまとめると以下

のようになろう。

第1に、家庭背景は、男子の教育アスピレーションと女子の教育アスピレーションともに対し直接的な影響を与えている。しかしその影響力はそれほど強くない。これは、中国ではまだ階層分化が進行しつつある状況にあり、また入学者選抜において主に業績原理が働いているためと解釈できるであろう。一方家庭背景が男女の教育アスピレーションに与えた影響はほとんど学業成績や高校ランクを媒介とした間接的な効果であることがわかった。このような高ランクを媒介とした間接効果は、一方では学校教育を通じて階層間格差を縮小させるという観点からみれば有効かもしれないが、他方では同じ家庭背景の場合、重点校と非重点校という高校ランクが教育アスピレーションの差異をもたらすということは、不利な家庭背景をもつ生徒にとっては、ますます不利になると考えられる。後述するように、非重点校に在学することは、特に女子の教育アスピレーションにマイナスの影響を与えるからである。

第2に、学校ランクは、男子の教育アスピレーションにほとんど影響力をもっていないのに対し、女子の教育アスピレーションに対しては有意な効果をもっている。その影響力は、特に非重点校の高校ランクⅢで最も大きい。

第3に、以上の高校ランクと関連する要因として、高校生本人の中卒成績や現在の学業成績が男子の教育アスピレーションと女子の教育アスピレーションともに対し大きな影響を与えていることがわかった。これは、中国では大学の粗進学率⁽¹²⁾がまだ15%にとどまっており、進学競争が激しい現状の中で、高等教育機関の入学者選抜において学業成績が非常に重要な選抜基準となっているため、それを予期した形で本人の学業成績に基づいた教育アスピレーションに影響を及ぼすと解釈できるであろう。

第4に、価値志向に注目した結果、自己実現志向は男子の教育アスピレーションのみに小さな負の効果をもっているが、社会的地位達成志向はそれに対し効果を持たなかった。このように、自己実現志向が教育アスピレーションに負の影響をもっているということから、生徒が付きたい職業は、高学歴を要する社会的地位の高い職業とは限らないと考えられるであろう。また、社会的地位達成志向の効果があまりみられないという結果から、現在、高校生たちは、将来の職業選択において興味や関心など職業を通じての自己実現、あるいは社会的地位の高い職業に目を向けた地位達成に関心をもっているようではあるものの、実際には、高学歴の獲得を通じた社会的地位達成より、むしろ経済的地位達成を目指しているのかもしれない。これに関してはさらに検討する必要がある。

最後に、本研究で行った男女別の教育アスピレーションの規定要因分析では、全体の説明される分散の割合が20%にも達していなかった。これは、実際にはその他の要因が教育アスピレーションに影響を及ぼしている可能性があることを意味する。したがって、今後、高校生の学歴意識などの調査をも含めてさらに検討する必要がある。また、分析で明らかになったように、男女間で異なる教育アスピレーションの規定要因の構造が存在している。それは、女子のジェンダー意識が学歴取得や将来展望に関わっていることも考えられる。今後、この視点から男女間の教育アスピレーション分化を明らかにすることも重要な課題である。

〈注〉

- (1) 出身階層要因が高校生の教育アスピレーションに与える影響について、周知のようにアメリカ・ウィスコンシン大学の研究グループによって明らかにされている (Sewell, Haller & Portes, 1969)。それによれば、教育アスピレーションは本人の学業成績に規定されるだけでなく、自分の親の学歴、職業といった出身階層、また親の教育期待にも影響されるという。またローラン (Rohlen, 1983) や岩木・耳塚 (1983) の研究では、生徒の進路選択は高校ランクによって強く左右されるが、その高校ランクがまた出身階層と密接な関連にあるというメカニズムが提示された。
- (2) 多少の違いがあるにもかかわらず、教育アスピレーションとほぼ同じ意味で進学希望、進学意識、進学アスピレーションなどの用語を使う場合もある。
- (3) 社会階層分化について、最近、中国社会科学研究院の研究グループは、「当代中国における社会構造変動に関する研究」の報告書をまとめた (陸 2002)。生産手段の所有制度による中国階級・階層を区分する従来の捉え方に対し、職業分類を基礎とし、組織的資源 (行政・政治権力)、経済的資源 (資本・生産手段)、文化 (技術) 的資源 (知識・技術) の所有状況によって、当代中国の社会階層を、国家・社会の管理者、企業経営者、私営経営者、専門技術者、事務員、自営業、商業・サービス業者、労働者、農民、無職・不完全・完全失業者の10階層に区分している。また、それぞれの階層の社会的地位は、「上」、「中の上」、「中」、「中の下」、「下」という5ランクから構成されており、特に文化的資源、経済的資源の所有状況において大きな差異が生じていることが指摘されている。
- (4) 近年の日中比較研究 (秦 1998) によると、親の子どもに対する短大・高専、大学、大学院を含む進学期待の比率は、中国のほうが日本よりも高くなっているという。参考までに数値をあげておくと、その割合は小学校5年生では、日本64.1%、中国86.2%、中学校2年生では日本57.1%、中国76.3%となっている (前掲、71頁)。またこのような期待は小卒・中卒後の希望する学校の名前にも反映している。例えば、将来進学してほしいと望む具体的な大学の名前を親からよく聞かされている子どもが、日本の小学校5年生4.6%、中学校2年生1.3%であるのに対し、中国の小学校5年生33.2%、中学校2年生20.9%にも達している (前掲、51頁)。
- (5) 重点校政策は、建国からまもない1953年に打ち出された1つの教育政策である。それはもともと初等教育段階から高等教育段階まで実施されていたが、近年義務教育法の実施に伴い、小・中学校の重点校が原則として廃止されている。重点高校は、省・自治区・直轄市、地区、市、県・区など各レベルの区画ごとに指定されているが、生徒の募集はほとんどの地域において学区などに制限されておらず、主に前段階の市の中卒統一試験成績によって行われている。
- (6) SISSとは第2次国際科学教育研究の略語である (なお、原文には英文表記がないため、ここでは略語のみを表す)。1987~1990年に中国の7省・自治区でSISS研究が行われた。A市にある省において102校の2444名の中学生に対して行った調査結果によれば、重点校と非重点校で生

徒の将来の希望進学段階が異なっている。特に大学と大学院への進学希望率は、重点校では39.0%と14.0%であるのに対し、非重点校では25.0%と8.0%となっている（騰・趙、1995、297頁）。

- (7) 高校生の職業希望に関する変化について、次のような興味深い調査結果がある。10省、市の調査によると、高校生の職業選択で最も重視する3つの要因は、才能の発揮（36.7%）、興味・関心（12.9%）、収入（14.9%）である（孫・鄭・康 1999）。また最近の調査でもこれとほぼ類似している傾向にあることがわかった（翟 2001）。
- (8) 1993年、「中国における居民の家庭生活調査」研究グループが全国3012名の対象者に対し実施したアンケート調査結果によると、100種類の職業威信スコアについて上の10位は、大学教授（87.6）、政府部長（87.0）、大都市市長（81.3）、社会学者（79.2）、検察長（78.4）、建築エンジニア（77.8）、国有大手企業社長（76.9）、政府機関事務員（76.4）、自然科学者（75.5）、大学教師（75.5）となっている（陳 1995、85-87頁）。
- (9) 人口約300万人を超えたA市には5つの区に、総計83校の公立普通中等学校がある。これらの学校は、高級中学（高校）、初級中学（中学校）、完全中学（中・高併設校ではあるが高校進学の際に入学試験が必要である）に分けられている。本調査は、4つの区における完全中学で実施した（表1）。なお、H区にある高校は中心部に位置していないため、対象校として選定されていない。
- (10) 調査サンプルは無作為抽出したものではないが、各レベルの高校が含まれている。特に非重点校の中で教育的質のやや高い「骨幹校」（中堅校）と呼ばれるレベルの学校もあれば、さらに低いレベルの「薄弱校」（底辺校）もある。
- (11) 都市・農村2次元構造と戸籍制度とは、1958年から実施された戸籍によって都市と農村を区別して管理する社会制度であり、すなわち原則として農村住民の都市への移住は認められないということである。現在、戸籍による社会移動への規制が依然として存在しているため、学歴の獲得を通じて社会的地位を達成するのは社会的上昇移動の重要な手段となる。したがって、この戸籍制度が廃止されない限り、生徒のより高い教育水準に達する欲求、すなわち教育アスピレーションは、自分の戸籍が都市か農村かによって影響されると考えられる。
- (12) 高等教育の粗進学率（原語：毛入学率）とは、政府の定めた高等教育を受ける人口の総数（満18-22歳年齢コーホート）に対する各高等教育機関に在籍する大学生総数の比を指す（教育部発展計画司 2003）。

[参考文献]

- 荒牧草平、2000、「学校生活と進路選択」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房、81-106。
- 、2002、「現代高校生の学習意欲と進路希望形成—出身階層と価値志向の効果に注目して—」

- 日本教育社会学会『教育社会学研究』東洋館出版社, 5-23.
- 有田 伸, 2002, 「教育アスピレーションとその規定構造」中村高康・藤田武志・有田 伸編著『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社, 53-72.
- 中国教育部計画司, 2003, 『教育統計報告』第1期(総第26期)(中国教育部、<http://www.moe.edu.cn/stat/tjgongbao/>).
- 陳 嬰嬰, 1995, 『職業結構与流動』東方出版社.
- 袁 振国, 1999, 『論中国教育政策的轉變: 对我国重点中学平等与效益的個案研究』廣東教育出版社.
- 藤田英典, 1979, 「社会的地位形成過程における教育の役割」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会, 329-361.
- 秦 政春, 1998, 「子どもたちの学校生活における国際比較—日本・中国・台湾—」田中敏明(代表者)『少子化時代における子どもの生活、文化、環境に関する日中間比較分析的研究』平成5年~8年文部省科学研究費補助金大学間協力研究成果報告書, 41-84.
- 岩木秀夫・耳塚寛明, 1983, 『現代のエスプリ 高校生—学校格差の中で』No.195 至文堂.
- 許 欣欣, 2000, 『当代中国社会結構變遷与流動』社会科学文献出版社.
- 姜 星海, 2001, 「中国都市部における子どもに対する親の学歴期待に関する研究—重点中学校と普通中学校の比較—」日中社会学会編『日中社会学研究』, 9, 61-77.
- 陸 学芸主編, 2002, 『当代中国社会階層研究報告』社会科学文献出版社.
- Rohlen, Thomas P. 1983, 友田泰正訳, 1988, 『日本の高校—成功と代償』サイマル出版会.
- 孫雲曉・鄭新蓉・康丽穎, 1999, 「您了解今天的中小学生嗎?」『中小学管理』, 11 (中国教育信息网 <http://www.chedu.com/jyzx/jyxz/000429-01.htm>).
- Sewell, W.H., A.O. Haller, and A. Portes, 1969 The Educational and Early Occupational Attainment Process. *American Sociological Review*, 34(1), 82-92.
- 朱 光磊, 1998, 「从身分到契約—当代中国社会階層的分化与重組」朱 光磊(代表者)著『当代中国社会各階層分析』天津人民出版社, 1-48.
- 滕 純・趙 学濂主編, 1995, 『教育的機會均等和提高教育質量』廣東教育出版社.
- 翟 帆, 2001, 「都市青少年遭遇新問題(二): 择業、青少年陷入煩惱」『中国教育報』2001年12月10日②.

Factors Affecting Educational Aspirations of Senior Secondary School Students' in China

ZHANG Chunlan

The purpose of this paper is to clarify the factors affecting educational aspirations of senior secondary school students' in China. Using data collected from 12 senior secondary high schools in a city of western China (let us call this city "A"), this study examines the effects of family background (parents' educations, family register), the hierarchical status of schools (such as province level key school, city level key school and ordinary school), the academic achievement (students' grades in junior secondary school, their present grades) and two value orientations (toward social status attainment and self-fulfillment) on girls' and boys' educational aspirations.

The main findings are as follows:

- (1) The parents' educations have direct effects on girls' and boys' educational aspirations, but they are very small. The parents' educations also showed indirect influences on girls' and boys' educational aspirations.
- (2) In comparison with boys, it appears that the hierarchical status of schools have larger effects on girls' educational aspirations.
- (3) The academic achievements, such as students' grades in junior secondary school and their present grades, have the largest effects on both boys' and girls' educational aspirations.
- (4) The orientation toward self-fulfillment has significant effects on boys' educational aspirations, but not very strong. On the other hand, the orientation toward social status attainment has not significant effects on either boys' or girls' educational aspirations.

In a word, the findings show that boys' educational aspirations are affected by the academic achievement and the orientation toward self-fulfillment. On the other hand, girls' educational aspirations are affected by the academic achievement and the hierarchical status of schools.